

マイルドなピクト人が  
座に登録される話とそ  
れからの話

ピクトグラム人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ピクト人 in 日本人。ただし、ミキサ―されてピクト人が主軸である。そして出来上がったのがマイルドなピクト人であった。仲良くしよう。できないなら死ね。因みに向かってくる人は問答無用で死を、である。

そんなピクト人が何かの間違いで座に登録されてしまう話。そしてそれからの話。勿論カルデアに行きます。具体的には第六章。聖晶石持って遊びに行くね。 ※ギャグ、コメディ―、です。頭空っぽで見てください。

# 目次

01	その男、ピクト人	1
02	前世はモデラーでした	7



## 01 その男、ピクト人

「同胞、我が同胞よ。目を覚ますのだ。もう既に先行した同胞がキヤメロットと交戦中だ。我々も戦線に立ち一匹でも多くのキヤメロットを屠ろう」

目を開けるとそこには化物がいた。真つ先に目に入るのは六つの穴と青いラインが特徴的なフルフェイスのヘルム。それから、筋肉質でありながら細長い印象の身体は肌のおとんどが緑色だった。まさに化物の名が相応しいだろう。どことなく何処かのエイリアンのようであり、そういった意味であるなら宇宙人といっても良いかもしれぬ。どちらにしても未確認生物めいた容姿なのは保証する。

そんな彼らの総称はピクト人という。そう、人である。一種の人類としてこの地に根を卸し、それだけではなく国を築いているのだ。

「了解した。すぐに行こう」

そうして私は赤色の腕で隣に鎮座した鉄の塊を掴み立ち上がった。それに合わせて周りのピクト人は各々の武器を手にして整列する。それを確認した私は彼らの先頭に立ち、彼らの方を向いた。

「さて、同胞諸君。聞くまでもないが、聞いておこう。我らが敵は何だ」

恒例の号令である。これを合図に戦闘へ気持ちを切り替えるのだ。そして同胞もそうするため応える。

「キャメロットである」

重なる声。それだけで大気が揺れ、風が巻き起こる。敵はキャメロット。それを言葉にすることで殺意を燃やすのだ。

「そうだ。ならば我々のすべきことは何だ」

再び問う。敵は定まった。ではそれをどうするか。これも決まっていた。だからそれ同胞達は口を開き言葉にする。

「圧倒的な殺戮、即ち圧殺である」

成った。これにて同胞達は圧殺の体現者となったのだ。あとは私が引き金を引くだけ。故に引く。

「よろしい、ならば武器を持って。剣でも槍でも斧でも、なんなら拳でも良い。そしてその手で齎すのだ。神すら目を背ける——圧殺を」

私の掛け声に応え、彼らは吼えてそして駆ける。ただ本能に従いキャメロットを滅ぼすため駆けるのだ。

ここまでくればわかるだろうが、私も彼らと同じピクト人である。なのでキャメロットを滅ぼすのは各かではないが、同胞達とは違い何がなんでも殺したいという訳ではな

い。しかしそれは本能に打ち勝ち、まともな人間のような自我に目覚めたとかではなく、私の中身が元日本人だからである。とはいっても全てを受け継いでいる訳ではなかった。人格は消えているし、倫理観もほとんど残っていない。具体的にいうと”手を取るなら共に、そうでないなら死を”くらいにマイルドになっている。ピクト人としては異端であり、同胞に首を傾げられたこともあったが、持ち前の戦闘力を活かすことでハブられることなくやっていけていた。努力の甲斐もあつて今では同胞を率いる立場にいる。目立つのは好きな方ではないが、任せられた以上は全うしたいと思う。具体的には――

「――圧殺である」

地を踏み締め、跳躍。そしてキヤメロツトの目の前に着地し、右手に握った鉄塊――鉄のような金属を固めて取っ手をつけたもの――を薙ぎ振るう。間も無く重低音金属が響き、拉げたキヤメロツトが空を舞い鮮血溢しながら自軍の方へ落ちていく。それを見たキヤメロツト達はざわめき、一つの単語を繰返し叫ぶ。奴等の言葉は理解できないが、私が現れる時にその単語が出てくるので私の二つ名的なものだろう。私もそこそこ有名だということだ。目立つのは好きではないと言ったが、目立つたら目立つで少し嬉しいのは日本人としての性がなのか、あるいは私というピクト人がそういった者だったのか。ともかく二つ名というのは好ましい。その殺し方から『圧殺』とか、ある

いは武器から『鉄塊』とか、赤い身体から『返り血』とかウキウキする。いずれ彼らの言葉を勉強するのも悪くないかもしれぬ。

「圧殺」

そんなことを思いながら私は今日も鉄塊を振るう。その度にカメラロットがポツポツのように弾けて、鎧の隙間から血を漏らしながら飛んでいく。それを眺めてまた鉄塊を振る。上にばかりに飛ばしてもつまらないので時々彼らの波に飛ばす。するとボーリングのようにカメラロット達は転げ回る。そして倒れたカメラロット達の上空へ跳び、そこから地面に向かって鉄塊を投げ飛ばして更に蹴りを入れる。衝撃の波紋が広がり、カメラロット達は潰れていく。

そうしている内に地面は赤く染まり、カメラロットも、我が同胞達も、多くの人間が屍に変わる。

「圧殺、圧殺、圧——やはり来たか、こんにちは」

その頃だ。ただのカメラロットとは比べ物にならないほどの力をもったスーパーカメラロットがやって来る。彼らは同胞達では手に負えない。私が本気で戦って、なんとか引き分けて逃げられるほどの強さである。故に彼らの参戦が撤退の合図となつてた。

であるならば、私の役目は彼の足止めである。毎回死ぬような思いをするが、この身



体はピクト人の尺度で測つても丈夫な部類なので問題は無い。さて、接敵である。

「二応、聞いておこう。私と話す気はあるか。お互い、殺し合った仲ではあるが——」

有象無象のキヤメロットは目が合った瞬間に、襲ってくるので殺すしかないがスーパーキヤメロットは、何かを叫んだり、探ったりしてくるので、少し時間がある。その時間を利用して手を取り合えるか話しかけてみるのだが上手くない。あちらの言葉が通じないのだから、こちらの言葉が通じるはずもないのだ。こればかりは仕方がない。

「ならば武器を持とう」

鉄塊を構える。今回現れたスーパーキヤメロットは紫色のスーパーキヤメロットだ。彼の剣技は我々では到達できない域に達している。それを凌ぐのは至難だが、どこか楽しみな自分もいるのだ。どちらの血がそうさせるのか、どうにも戦闘好きな私は一騎討ちというのが堪らなく好きであるらしい。だとすれば「パープルキヤメロット」は最良の相手である。勝つことはできないだろう。しかし一撃でも、二撃でも、彼に傷を付けることができたのなら私は今日、気持ち良く寝ることができる。

「それでは、圧殺を始めよう」

熱い展開。日本人たる私がどこかで燃え上がる。ピクト人としての私も、キヤメロットと戦えることで心が沸き立つ。

そして、地が砕ける。足型が地面に刻み込まれ、私の身体は前へと加速した。手にした鉄塊を勢い良く、後ろへ引き、狙いを定める。コンマ数秒の世界だ。その領域に足を踏み込んだ、その瞬間であつた。

「我が麗しき父への叛逆！」

どこかで聞いたことのあるような掛け声と共に私の身体は光に吞まれ、焼かれ、衝撃によつて遙か彼方へと飛ばされる。何が起きたかわからない私の、微かな視界の中で見えたのはゴテゴテとした鎧の“ヤンキーキャメロット”が剣を振り下ろした姿であつた。

私は思った。

野郎、ぶつ殺してやると。

## 02 前世はモデラーでした

鋭くそれでいて鈍い痛みで目が覚める。久しいその感覚に不快感はない。むしろ、そう言えば私は人間であったと安心するくらいのものだ。どうもこの身体は堅すぎる。今までも腹に風穴を空けられたりしたことはあったが、悶えるほどの痛みではなかった。

だからといって、私は痛みを快感に思う人種ではない。焼けるようなこの痛みは耐え難い苦痛であった。どうにかしようとするが、身体は動かない。接続が切られたかのようにピクリともしないのだ。

「嗚呼、そういうことか」

接続が切られたどころか、物理的に斬られていた。焼き斬られていたというのが正確な表現だろうか。両腕は根本から切断され、右足は膝から下が、左足は脛脛から下が無くなっていた。良く見れば脇腹も噛み千切られたかのように抉られている。これでも生きているのは流石ピクト人の身体と云ったところか。いや、そうではない。私の身体が特別なだけだろう。周囲に散らばった同胞の残骸を見ればそれは明らかだ。

「同胞、我が同胞よ。誰かいないのか」

もしかすると私以外の生者がいるかもしれない、と声に出して確認する。返事はなかった。ここには私一人しかいないらしい。悲しいことだが、それは受け入れるしかないだろう。これは戦争なのだ。恨まれはすれ、恨みはしない。殺しておいて殺すな、などという都合の良い考えはもってはいないのだ。なのでキヤメロットは殺す。

とは言え、四肢の欠損したこの身体ではそうすることもできない。今のところ、痛みで辛いことを除けば概ね頭はスッキリしている。焼かれていたお陰か出血も無く、このまま直ぐに死ぬということは無いらうが、それも時間の問題だ。何とかして動けるようにならなければならぬ。風穴程度の怪我ならば少し経てば治っていた。しかしここまでの欠損となると治るのかすらわからない。それどころか焼かれているので感染症等の脅威も考えられる。

これは詰み、というやつだ。自分が何処にいるのかもわからない、助けてくれる者もない。精々転がることしかできない私に何ができるのか。文字通り手も足もでない。「だから何だと言おうのだろうか」

詰んだのなら盤上を引っくり返せば良い。手も足もでないのなら、首を、舌を伸ばせば良いのだ。私はそれができる人間である。日本人という神の視点にも似たその知識がある私にとって、この程度はピンチですらない。

一先ずは起き上がろう。私は後頭部を打ち付け、その反動で上半身を跳ね上げる。そ

して使えそうな部品を探す。できるだけ長く長い部品。自分に近い部品を探すのだ。  
「まずは足だ」

こんなことに時間を費やしている暇はない。機動力を上げるためにも足は必須だ。そうして見渡すが、どれも欠損が激しく、使えそうなものはない。しかしそんなことは些細な問題だ。使えるものから使えば良いのである。

「おっと、バリ処理、バリ処理」

部品を合わせて、揃えて、慣らして、魔力で強引に接合する。口で行うため時間はかかったが、納得のいく右足ができた。そしてそれを己の膝の切断面に押し当て、馴染ませる。

それは一種の王道であった。欠損部分を他で補う。それは義手だったり、悪魔であったり、何かの能力であったり、未来の自分の腕であったり。ならば私が、化物である私にできない訳はない。魔力や魔術が存在し、そして尋常ではない回復力と強度を誇るピクト人の、それもその中でも異常な私の身体がある。出来る出来ないではない。やるのである。

「悪くない出来だ」

親指が二本、人差し指が三本の右手を握り、開く。次いで薬指だらけの左手を同じように動かす。肩を回し、肘を曲げたりして間接の稼働域を確認する。それから屈伸を

し、足を伸ばして、歩き走った。両方右足のせいか違和感もあり踏ん張りの効き辛い、動けない程ではない。本格的な戦闘を行うには心許ないが、戦線に復帰し赤い華を咲かすことくらいはできるだろう。

そうと決まれば早く同胞達と合流しなければならぬ。そのためにはまず、自分が何処にいるかを把握する必要がある。転がっていた先程に比べれば視点も高くなり、見渡せる範囲も増えたとはいえ、その範囲には同胞の姿どころか他の生物の姿も見えない。ならば、と目を閉じて集中する。聞こえるのは自然の音ばかりであったが、東の方向から微かではあるが、死の気配が感じられた。

「同胞達よ、今行くぞ」

一人呟く。果たして、目が覚めたのはあれから直ぐのことだったか、もしくは幾らかの時と日を刻んだのか。どちらにしろ私という穴は小さくないだろう。無論、その穴を補わないほど我が王は愚かではない。しかし、自分でいうのも何だが私程の戦力は両手に収まるほどである。大きな損失だ。私のために死ぬ必要のなかった同胞が死んだかもしれない。その分キヤメロットや他の人間をより多く殺せたかもしれないと思うと自身に腹が立つ。しかし過去を睨んでも仕方がない。だからこそ私は早急に合流し、奴等を殺すのだ。

弱体化したが、問題はない。今回のことで私は“遊び”を捨てることができた。あの

時私は目の前のパールカメラロットに対し、殺意だけでなく歓喜を抱いていたのだ。それがこの結果を生んだのである。故に私は今後戦闘中において、殺意以外を抱くことはない。その点において、私は強くなった。

「……な」

さあ、行くぞと鉄塊を右肩に担ごうとして、空振る。鉄塊を持っていないことに気が付き、視線を右左にと向けた。しかし慣れ親しんだ無骨な姿はない。そう言えば回復中に相棒を見なかった。光に耐えれなかったのは同胞達だけではなかったらしい。ヤンキーカメラロットは必ず殺す。

しかし、そうなると武器を見繕わなければならない。なくとも戦えるが、あった方が良いに決まっている。帰還できれば武器は幾らでもあるが私の戦闘スタイルに合うものはない。鉄塊もそのため造ってもらったオーダーメイドなのだ。どうするものかと視線を落とした。そして一つの言葉を思い出す。それは私の言葉ではなく彼の、日本人の記憶の中の言葉であった。

「二人は皆のために、皆は一人のために」

良い言葉だ。

残ったジャンクを手に取り私はそう思った。